

【ポスター発表】

ソーシャルワーカーの高次脳機能障害当事者が 講演活動で思いを伝える際の困難さの構造

—ある当事者と研究者の共同事例研究の試み—

○ 南海福祉看護専門学校 野村 脩 (002424)

杉原 久仁子 (桃山学院大学・010269)、廣瀬 雅典 (育ち合うソーシャルワークけんきゅう所・006618)

キーワード：高次脳機能障害、講演活動、当事者と研究者の共同事例研究

1. 研究目的

障害当事者の中で講演活動を行う者は少なくない。講演活動が社会と自己の両方の変革を実現できる有用な活動だからであろう。しかし、知的あるいは認知機能になんらかの機能障害がある障害当事者にとっては、講演活動を行うにあたってある種の困難さが伴うことが推測される。この困難さを解明できれば、対策を講じることができ、講演活動が促進される可能性がある。しかし、これらの障害当事者の講演活動に伴う困難さを解明する先行研究は見当たらない。そこで、本研究はまずは高次脳機能障害当事者を対象として、講演活動で思いを伝える際の困難さの構造を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

本研究は、高次脳機能障害の当事者である廣瀬雅典と研究者である野村・杉原が共同で取り組む「廣瀬雅典という1事例」の事例研究（質的記述的研究）である。ソーシャルワーカーである廣瀬が脳梗塞を発症し、障害当事者となった。これまで「支援する側」にいた廣瀬が「支援される側」に立つことになったのである。発症以前と発症以後とで、障害観や支援観は変化した。廣瀬は講演活動を通して、この変化の体験を社会（学生や福祉援助職など）に伝え、より良い障害観やより良い支援観の形成に寄与したいと考えている。

しかし、廣瀬の実感では、この体験および体験に基づく自分の思いや考えを講演活動で伝えようとしてもうまく伝えられていない。うまく伝えられない主要な原因は高次脳機能障害と考えられる。高次脳機能障害当事者が自身の体験や思い、考えを講演活動で伝える際の困難はどのようなものなのか、その構造はいかなるものであるのかについて解明したいと廣瀬は考えた。しかし、高次脳機能障害のためうまく言語化ができないため、単独でいわゆる当事者研究を行うことに困難を感じた。そこで、研究者である野村・杉原と共同で研究することとなった。廣瀬に対して野村と杉原が半構造化面接法によるインタビュー調査を実施し、インタビューの逐語録、廣瀬の講演後の記録、廣瀬と野村・杉原間のメール、分析時の語りをデータとして、質的統合法（KJ法）（山浦2012）の個別分析を行った。

3. 倫理的配慮

当初考えていた研究デザインが廣瀬が自身を対象とする当事者研究だったこともあり、研究倫理審査を受けずに研究をスタートさせてしまった。ただし、研究開始当初より日本社会福祉学会研究倫理規定を遵守しながら実施した。研究のすべての段階において廣瀬と

野村・杉原が対等な関係となるよう留意した。例えば、データの分析作業は野村と杉原がリードして行うものの、廣瀬も常に分析作業の場に同席し、その都度廣瀬に確認しながら作業を進めた。また、インタビュー等のデータの内容に廣瀬が違和感をもつ際には、追加のデータ収集や、データの削除、表現の修正を行った。研究発表の原稿についても同様に、その都度廣瀬に確認しながら執筆している。また、インタビューの際には、廣瀬の高次脳機能障害に伴う失語症などの症状に配慮して、ゆっくりと発言内容を確認しながら実施した。また、易疲労などの症状に配慮して、途中休憩をはさみながら負担がかからないように実施した。なお、本研究に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はない。

4. 研究結果

分析の結果、明らかになった「困難さの構造」は下記のとおりである。廣瀬は【当事者としての立場とソーシャルワーカーとしての立場】の【2つの立場】を独自の立ち位置として講演活動を行っていきたいと考えている。しかし、この【2つの立場】はそもそも【両立の難しさ】を伴うものであり、廣瀬自身も当事者会での活動の中で【ソーシャルワーカーとしての立場からの当事者の立場への違和感】を持ってしまっている。廣瀬は【講演活動】で【ソーシャルワークの価値】については【うまく伝えられ】ず、【伝えるのが困難】と感じている。この1つの原因として、【聴衆側が】廣瀬に【求め】ているものが、【「当事者役割」】であり、【ソーシャルワーカーとしての立場】からの話よりも【当事者としての立場】からの話の方であることが挙げられる。これを【講演活動の外在的問題】と名づける。一方、【内在的問題】は2つあり、1つは【伝えたい内容であるソーシャルワークの価値に対する理解不足】（【内容面での問題】）であり、もう1つは【高次脳機能障害に起因する技術的困難さ】（【技術面での問題】）である。一方、【当事者としての思いや症状】の方は比較的【講演活動でうまく伝えられている】。ただし、廣瀬が【講演活動を通して】将来的に【目指】しているのは、【ソーシャルワークの価値の実現さらに共生社会の実現】であり、【思いや症状】の理解のみに留まらない。この目標に向けて、【講演活動の内側の支え】である【回復よりもリカバリーという考え方】と、【外側の支え】である【理解してくれる仲間が存在】に支えられながら、廣瀬は講演活動を続けている。

5. 考察

分析で明らかになった「困難さの構造」では特に下記の2点が特徴的である。すなわち、①【外在的問題】－【内在的問題】、【内側の支え】－【外側の支え】、【当事者としての立場】－【ソーシャルワーカーとしての立場】というように二項対立が入り組んでいる点と、②【共生社会の実現】が講演活動で目指すべきものであると同時に講演活動のすすめ方そのものとなる可能性があることや、【リカバリーという考え方】が講演活動を心理的に支えるものであると同時に講演活動の内容そのものであることなど、単純な規定関係ではなく、二面性のある複雑な構造になっている点である。なお、本研究で「困難さの構造」が明らかになったことで、困難さの克服の道筋もいくつか明らかにすることができた。